

特集 子どもと読書

子どもの中に読書のルーツを

青木 孝安（財団法人育てる会 理事長）

恐らく、これは全国的傾向かと思いますが、各地に「親子読書の会」といった名前のサークルがあり、子どもに読書の習慣をつけさせるための地味な活動を続けています。いくつかのサークルがまとまって、一つの集団をつくっているもの、または、まったく単独で活動を続けているもの、または、教育委員会から助成金をもらって活動しているものなどもあるようです。

また、育てる会の会員の中にも何人かおられるようですが、自分の家の一部屋を開放し、自分の蔵書を置いて、近所の子どもたちのため、子ども図書館を開い

ている人もいます。

このように、子どもたちに読書の習慣をつけさせるため、様々な努力が続けられております。問題は、このような活動に仲間入りした子どもは皆、読書好きになるのでしょうか。また、読書好きになったというところで、手放しで喜んでしまつて良いのでしょうか。極端なことを言いますと、読書の味を知ったがために、読書に夢中になり余暇の大部分を読書に費やすような子どもになったとして、安心して良いのでしょうか。

半年ほど前のことですが、私は、会員の方がなさっている親子読書会の座談会に出席しました。話題のテーマは、子どもたちの野外活動（特に山村留学）についてでしたが、自由な話し合いになった時、あるお



母さんが、このように言いました。

「こうして、母親である私がいつしうけんめい親子読書の会をやっているのですが、恥ずかしいことに、肝心の子どもはさっぱり読書をしてくれないのです。どうしたらよいのでしょうか」

この質問に対して、私は次のように答えました。

「どの子どもも一様に読書好きにさせる必要はないと思います。どだい、子どもによって発達状態がちがいますから、そんなことは無理でしょう。問題は、お母さんが読書会に参加したから子どもが、読書が好きになったということより、子どもの心に、そういう母親の姿を刻みつけているというだけでも、すばらしいことではないでしょうか。それだつて、子どもが将来、読書に向かう素地を作っていることになると思います」

ここで、私の子ども時代の読書について述べさせていただきます。

私は、そんなに読書好きの少年ではなかったように思います。とにかく、学校から帰ったら外で遊ぶのに

忙しくて、というよりその方が面白くて、静かに読書をする時間はなかったようです。わずかばかりの学校の宿題をするのに精一杯でした。宿題だつて時々は、やらずじまいでした。こんな時、もし、私の母親がよい子になるための——と大人たちが考えている——本を次から次へと私に押し付けていたら、私は恐らく一生の読書嫌いになつていたかも知れません。まして、母親の心の裏に、文章の読解力をつけ国語の成績を良くしたいという野心がひそんでいたら、なお一層のことだつたと思います。

私は、私の少年時代を読書三昧で過ごさなかったことを良かったと思つています。それより、自然を相手に思う存分遊び回ったことが、かけがえのない貴重な体験として今日の私の中に生きていると思います。

今、私は仕事の関係上いろいろの本を読みます。大別しますと、科学的なもの、問題意識を持ち、それを次から次へと追求していきます。疑問を持ち、それが解け、また新たな疑問が生まれ、またそれを追求していくという過程をたどります。見えなかった世界が見

え、新しい解釈に目が開けていくという、実に楽しい精神作業です。

山村留学の子どもたちには、休日を利用していろいろな自然観察活動をさせます。地層や岩石についての観察活動をさせるために、それに関するいくつかの科学書を読みました。興味につられ、次から次へと読み進んでいくうちに、私は気がついたのです。この読書の支えとなっている私の地層、岩石への興味のルーツは、小学校五、六年生の頃、石ころ集めに夢中になり、明けでも暮れても勉強そっちのけで、布袋とハンマーを持って河原をうろつき回った体験に根ざしていることを。

考古学の本を読むことも私の好きな読書の一つです。そしてまた、今の仕事に必要なことでもあるのです。この読書を支えている私の興味のルーツも、少年の頃、“矢じり”——縄文時代の石の矢先——を探し求めて山の畑をはい回った体験に根ざしていると思います。

文学書についてですが、これとて幅広い体験が背景にあればこそ、読み取る深さもまたちがつてくると思います。特に、情操を育む文学書などについては、遠く幼児の時代の母親からの愛の体験に、読書のルーツ

があるように思えてなりません。

読書をする子、しない子、について単純な結論をくだしてはいけません。“する子”が良い子で、“しない子”が良い子でないと決していけません。子どもはいくつかの発達段階をへて成長していくのです。年齢の変化と共に様々な様相を呈しながら成長していきます。この成長過程の中で、どのようにして“読書のルーツ”を育てていくかが大切だと思います。

その一つとして、少年時代の自然体験をあげたいと思います。

読書あれこれ

山下 蒼生（本誌編集委員・元中学校長）

私は五歳の時、大病をして百日の間、生と死の間をさまよった挙句、死に損なったらしいのです。そのため小学校四年生頃までは虚弱な子で、学校をよく休んだそうです。そこで、とにかく丈夫な子にしなければと、両親はそればかり考えていたようです。それで低学年の頃は、今考えれば過保護な親の先駆者だったのでしょう。

本を読んだり、字を覚えることは二の次ということ
で、母の仕事は私に栄養をつけること、近くの練兵場
や学校の運動場に散歩することだったようです。

その影響かどうかわかりませんが、本を静かに読む
というよりは、体を動かすことの好きな子になりました。
家の庭つづきにある松林に行つては、その松の木
によく登りました。「木の上」っていいものでした。
その上で誰にもさまたげられずに読書でもするよう
だったら、もつと「木の上」はスバラシイところであ
ったと思います。

私の両親、ことに母はよく本を読む人でした。私は
読まなくても、内容はいつまんて聞いて用が足りる
のです。大変便利でした。今考えると母は十二、十三
歳の娘にとって司書の役割を果たしていたのです。

高等女学校を卒業して、某女子大の学生になります
と、曲りなりにも専門書や分厚い参考書を読まなけれ
ばならなくなりました。ところが、その頃になりました
と、私付きの司書が役に立たなくなりました。自分で
読み自分で考えなければなりません。これは当たり前前
のことですが、私にとって大変なことでした。

さあ、ここで差を感じたのです。「読書」が「ご飯」よ
り好きで「さあご飯よ」と言われるのが、とてもいや
だったという友人の、読むことの早いこと、早いこと。
私が一冊読み終わらないうちに、三冊目が終わっている
のですね。こんなにくやしいことはありませんでした。

私がこの友人のようなスピードで読めたら、三倍の
知恵袋をもった人間になっていたでしょうにと、今でも
くやしいと思うことがあります。やっぱこれが私
なんだと思い、自分をあわれんでみたり、私なりの読み
方で、自分を育てて来たのだと慰めたりしたものです。

せめて子どもたちは、私より読むことの大切さを知
り、じょうずに読む子になって欲しいと思ったのは、
三十年も四十年も前のことになります。

そして長男が六歳になり、小学校に入学する年の元
旦を期して、毎朝私が食事の準備をしている時、食卓
で聖書を一章ずつ大きな声で音読することを長男の仕
事に決めたのです。当時の聖書は文語体のものでし
たので、非常にタドタドしい読み方ですが、一生懸命
読んでくれました。

そうこうしている間に数年が過ぎて、小学校の三年

か四年の時だったと思いますが『桐一葉』（坪内逍遙）なんかを、書架から取り出した本で見ているので、「それわかるの?」と聞くと「わかんない」と言いながら読んでいました。まるで時間つぶしに字を追っているというか、ページをめくっているという感じだったのかもしれません。

かと思うと天文の本など見えています。「あなた、空のことや星のこと、おもしろいの?」と聞くと「うん、おもしろいね、お母さんも天体のこと好きだったの?」などと言つて、あの星、この星、そして隕石のことなど話し合ったこともありました。

また、長男が少年の頃でしたが、担任の先生のお友だちで天体に興味を持っていたらつしやった方と「隕石」について激論(?)をしたこともあったようでした。こんな風に、本なら何でもよいというように読む子でした。

そして中学生になり、電車通学をすることになりました。ところがこの中学生君、家を出てから駅までの間、本を読みながら歩いているのです。それを見たご近所の方から「お宅のお子さん、本を読みながら歩い

ているけど、あぶないわ」と注意を受けました。（今はとてもそんなことできませんね。それこそ危なくて。）それで私が注意すると「僕から本を読むことを取り上げるのは、死ぬという同じだ」などと、大人みたいなことを言ったものでした。

そんなある日、突然「前に読んだ時、わからなかった。あの『桐一葉』何となくわかるよ」と言いました。人の読書への興味のあり方はいろいろあるものです。何もわからずに、ただページを繰っていた子が、二度目にその本を手にして何となくわかってくる。そして、もう一度手にした時には、すっかり感銘してしまうとか、すっかりいやになつてしまふとかになるのでしょうか。

この子が高校、大学と進んだ時に、この好きだった読書が、どのくらい役に立ったか聞いたことはありませんが、でも本人は気がつかないでも、彼の人生にとって、よき智恵袋として「本」がどこにいても何をしていたも、びつたりと、くつついているのではないかなと思います。

次男の読み方は長男のような多読ではないのですが、中年といわれる年頃になつた二人の男同士の会話を聞

くのは、親として楽しいし嬉しいことです。そして思うことは、読書が人に与える効果には、読んだ量にもいくらか関係があるのでしょうか、それよりも、何を、どう読んだかの方が大きいのではないかということです。

肉体の糧としての食べ物については、よく若い間は「質より量」といつてモリモリ食べて、どんどん成長していきますが、年齢が高くなるにつれて「量より質」といつて食べる量を減らす人が多いですが、人を人として成長させるには、心の糧のひとつになる読書があります。その読書は質も量も大事ですが、それに加えて読み方とか、読んでのからの咀嚼の仕方が大事で、それが人間を大きく成長もさせるし、鼻もちならない人にもするのです。

「読書の秋」とか「燈下親しむの秋」などいわれる秋の夜長に、また冬になつて「こたつ」を囲んでいるひとときなど、テレビを消して親子で、じっくり読書の時間を過ごすのはどうでしょう。

そして読書するばかりでは、小さい頭に入るばかりですからパンクします。読んだ後は考えたり、咀嚼したり、話したりして、感動したこと、楽しかったこと、

よかったと思うことを周囲にまいて自分の頭に隙間をつくることです。そうするとまた、新しいことが入りますものね。

子どもと読書——母親の悩み——

時川 美津子（本誌母親編集委員）

読書週間が始まった日の「天声人語」に、本を読まない人は悪人、幼児に本を読んでやらない親も悪人、ひいては子どもに本とつきあう習慣をつけてやらない親も同様、との一文が目にとまりました。常日頃、本を読まない次男坊に手をやいている母親にとって、まさに手厳しい一文でした。

我が家の場合、三人の子どもたちと本の出会いは、福音館の『ちいさなうさぎちゃん』（ディック・ブルーナー）シリーズ四冊を毎日飽きずに繰り返し読み聞かせながら眠りにつくことにはじまり、それぞれに本を読み聞かせることは心がけたつもりでした。

今、高二の長男の場合は、小三の頃『ロビンソン・クルーソー』（ダニエル・デフォー）を読んでやったの

を最後に、どんどん自分で読み進み、いつもランドセルには二、三冊の本が入っていてフタがしまらないといった調子で、もう学校の図書室には読みたい本がないから、今度は市の図書館、と言い出すほどでした。

おっちょこちょいで口の達者な長男のこと、そんなハイペースで読み進んで、果たしてどこまで自分のものとなっているのか計るすべもなかったのですが、卒業文集などにしたためた一文を読む限り、それなりの糧を吸収していることがうかがえて安心しました。

ところが長女、次男と下に行くほど読書をしない傾向が強くなり、今四年生の次男は、夏休みのはじめに読み始めた『ファール昆虫記』（ジャン・アンリ・ファール）の一冊が、読書週間の今になってもまだ読み終わらないありさまで。もつともその間、好きな野球に関しては『プロ選手への道』といった本をちゃっかり図書館でみつけてきて、夢中で読んでいたのですが…。

原因として思い当たることは、上の子どもの場合、まだ図書館も充実していなかった頃でもあったため、親の方も、出なければその年齢に合わせて遊ばせ、学校で課題図書の販売があれば買ってあげたりしたのが、

次男の場合は上二人の部屋から、ごっそりと不要品よろしく持ち込まれた本の洪水の中で、野球やゲームに夢中になっているところへ、「少しは本も読みなさい、いろいろあるでしょう」と言われれば、抵抗があるのも無理からぬことかと思うのです。

それと、やっぱり時代の風潮でしょうか、マンガ以外の本を読まないと嘆くお母さんが以前より多くなつた気がするのです。

本を読む子にするには、親がまず読むこと。勉強する子にしたければ、親がまず勉強すること、という処方箋はよく聞かれますが、一日のサイクルの中で子どもと共にいる時間帯は家事におわれる時で、けっきょく子どもの留守中と外出の車中が、私の場合、読書の時となるのです。

「読みなさい、読みなさい」と口でうるさくいう事は、ほとんど効き目がありませんが、むしろ逆効果のようだし、とわかっていながら、読解力はすべての学力の基礎、算数だつて文章問題には読みとる力が必要なのですから、といわれれば、やっぱりつい口にしてしまうのです。

あれこれ思い煩うと、きりがありませんが、あまり目先のことばかりにとらわれないで、ここで一寸母親なる我が身の子ども時代はどうだったか振り返ってみますと、先ず一番印象に残っているのは、やはり三年生の時……

二年生で終戦を迎えたのですから本どころではない時代でしたが、学校のお昼休みにお弁当が終わると、先生が毎日朗読をしてくださったのです。『フランダーズの犬』（ウィーダ）、『レ・ミゼラブル ああ無情』（ヴィクトル・ユーゴー）と、それは黒いチリ紙で綴じたような、ぼつてりした粗末な装丁の本でしたが、先生も真に迫ってくると涙声で、じつと瞳をこらして聞いているクラス全員もしんみりして、少年・ネロと、犬・パトラッシュが凍え死んだ教会堂のクライマックスのところで、皆泣いてしまったのを思い出します。今もその時の先生の声の調子が、耳に残っているほどなのです。私の場合、そんな素晴らしい本との出会いを経験しながら、その割には文学的センスのなさに、今更ながらそれ以後の怠慢さに自責の念が強いのですが、果たして今、お昼休みにそんな朗読をしてくださる先

生がいるかしら、もしいらしたとして、子どもの方でそんなに感動を示すかしら、と疑問を感じます。

ダイジェスト版やテレビの普及で常に要約されたものにふれているから「これ僕、知ってるヨ」で終わってしまうのではないかと思うのです。乏しかったからこそ味わえた感動だったのかも知れません。

あの時あれほどの感動を受けた『フランダーズの犬』を、子どもの本棚から抜いたダイジェスト版で読んで、あまりのはよりように、がっかりしたところでは。結局ダイジェスト版にすると、筋だけを追って内面的な心理描写がほとんど省略されるのですが、読書で求めるのはむしろそちらの方なのですから。

いつ、どこでも、誰でも読める洪水の中で、読みたい本にやつとめぐり会った喜びを味わう経験をできずに成長していく子どもたち……。満たされすぎの弊害とでもいうのでしょうか。どんなご馳走も空腹感のある時に食べてこそおいしいのと同じで、情報ラッシュで知的空腹感を持つ、いともまもない子どもたちに、読書で感動することを期待する方が無理なのかしら、とも思ってみるのです。

再掲載を受けて――

消灯前の読み聞かせ

鈴木 由美（育てる会本部職員）

特集「子どもと読書」の再掲記事を読んで、子どもと本をめぐる大人の思いが普遍的なものであることをあらためて感じました。当時と比べると、ゲーム、スマホ、動画サービスなどが子どもの周りに定着してきて大人の懸念は大きくなる一方ですが、ここでは子どもたちがそういったものから切り離されて過ごす、育てる会の短期の活動での読み聞かせのことを書いてみようと思います。

育てる会の関係する各センターには子ども向けの本棚があり、保護者や会員の方などから寄贈され、多くの子どもたちの手を渡ってきた本が並んでいます。会としては「晴れているときはできるだけ外で活動しよう」というスタンスですので、子どもたちが自由に本を読む時間は限られてきますが、それでも雨の日やちよつとした空

き時間に本を読んでいる子の姿を見かけます。もちろん、本と出あい、その世界に入り込んでいる子をとがめるようなことはしませんし、指導員やリーダーが敢えて本の力を借りる場面もあります。

センターでは入浴の後に夕食、ミーティング、夜の活動などがあるため、子どもたちはそれらをすべて終わらせてから寝間着に着替え、トイレなどを済ませて消灯するのですが、この切り替えがなかなか難しいようです。たくさんさんの友だちに囲まれて布団に入ることさえも新鮮なのでしょう、さあ電気を消すぞという段階になってふと見渡すと、日中の疲れもあるはずなのに、眠る体勢に入っている子はごくわずかで、むしろわくわくそわそわした雰囲気になっている……そんなときに「読み聞かせ」をすることがあるのです。

夏冬春休みの短期の活動でいえば、低学年の活動班で絵本を読み聞かせることが多いようですが、おすすめの長編を何日かけて読み聞かせたこともありますし、体力を持て余した高学年と中学生の子どもたちに読み聞かせをしたこともあります。子どもの学年や本の種類にはさほど「縛り」はないようですが、声を上げて笑ってし

まうような本だけは、消灯前の読み聞かせとしては逆効
果なようです。

テレビともスマホとも無縁な生活では貴重な娯楽になる
のでしょう。「本を読むよ」と声を掛けると、多くの子
がすなりと横になってくれます。布団をかけて仰向け
になっている子、頬杖をついてこちらを見ている子……
みんなが落ち着いたら、表紙を見せながら題名を読み上
げます。「知ってる!」「○○なんだよ!」などの声が
返ってくることもあるので落ち着くのを待ち、早口にな
らないように気を付け、絵本のページをめくるときには
ちよつと間を取るなどしながら読み進めていきます。寝
間着に着替えたせいなのか、子どもたちの表情は日中よ
りも稚く見え、夜を迎えて寂しそだった子も、日中
リーダーをてこずらせていた子も、お話の世界に吸い込
まれているかのようです。

何とか最後まで読みきつて「おしまい」と本を閉じ
ると、読み手、聞き手、それぞれの緊張が緩みます。せつ
かく共有したその本についてみんな話したくなるので
すが、翌日にそなえて休んでもらわなくてはなりません

ん。「おやすみ」と言つて部屋を出ると、私自身もお話
の世界から戻ってきたような心地がします。

後日、読み聞かせた本を目に付くところに置いておく
と少なからず手に取る子がいるものですが、消灯時の読
み聞かせのねらいは読書意欲の向上ではなく、どちらか
といえば、ふだん映像に慣れ親しんでいる今の子どもた
ちに、本を読む、聞くというスローな体験をもたらしつ
つ、集団生活のにぎやかな楽しさから穏やかな休息の世
界へと導く、いわば
心の周波数を整える
ような作用にあると
考えています。そん
な大義名分はさてお
いても、読み聞かせ
の空間には家庭的で
和やかな雰囲気があ
り、活動期間中の貴
重なひとときとなつ
ています。

